幼児教育において音楽教育の必要性
～リトミックに着目して～

佐 藤　久 美 子
四條畷学園短期大学

Music Education is Necessary in Early Childhood Education
～ About Eurhythmics ～

Kumiko Sato
Shijonawate Gakuen Junior College

四條畷学園短期大学紀要　第 50 号　別刷
平成 29 年 12 月 25 日

研究報告

幼児教育において音楽教育の必要性
～リトミックに着目して～

佐藤 久美子*

Music Education is Necessary in Early Childhood Education
～ About Eurhythmics ～

Kumiko Sato

序文

子どもは皆、「学ぶ力」を持っている。

生まれたばかりの子どもは、自分から他者と関わる事は難しいが、親や周囲の人たちとの関わりの中で、人とのやりとりを自然に楽しめるようになり、それがコミュニケーションと広がり、言葉を得ることができる。

それが年齢を重ねるにつれ、状況に応じてどう対処すべきか、人とどう協調すべきかを学んでいく。

その「学ぶ力」を育てる方法の一つとして、私は幼児の音楽教育についてこれから述べたい。幼児の音楽教育とは、子どもの心理、生理的背景を考慮した上での日常生活と密着した形の音楽に関連した教育の事をいう。

相手が幼児（１歳から小学校就学まで）ならば、遊びの中で体を動かしたり、リズム感・音感を感じたり、歌う、音楽を聴く、楽器を奏する等の事により、感情を表す大きな力になる。すなわち、「からだで覚える」ということだ。

嬉しい心、悲しい心、楽しい心、苦しい心など幼児の感情・情緒を高めていくのに幼児期の音楽教育はかけがえのないものだ。

これらの活動を総称すると「リトミック」という音楽活動に結びつく。

この「リトミック」というものを通して、幼児教育の方法論をこれから説明していきたい。

１．リトミックの目的

リトミックとは、スイスの作曲家・音楽教育家エミール・ジャック・ダルクローズ（１８６５～１９５０）によって考え出された音楽教育法である。

ダルクローズは１９２５年の論文の中で「教育の目的は、学習の終わりに子どもたちが“私は知っている”と言うのではなく“私は感じ取った”“私は経験した”と言えるようにすることである。そして自己表現の憧れを持たせることである。強い情動を体験する時、我々はそれを精一杯他人に伝えたい欲求を感じるからである。生命力を持てば持つほど他人に与えることが出来るようになる。受けることと与えること、それは人類全体の偉大な方法である。」その教育理念は心の解放、より良き自己表現にある。と述べている[1)]。

我々大人はコミュニケーションを成立させるために、様々な表現方法を駆使する。とりわけ幼児は、身体的な動きが言語を超えて重要な役割を果たす。

つまり感情の発露は身体動作によって結びつくというのが幼児の表現形式の特徴である。

人間が人間らしく生きるために必要な事は、自己表現できる力を育てる事である。感覚的成長が最も著しい幼児期こそ、リトミックは重要なのだ。

２．方法

では、具体的にどのようなリトミックのレッスン方法があるのかを説明したい。

（1）リズム

色々活動方法はあるが、中心となるものは“リズム”である。

＊　四條畷学園短期大学　非常勤講師

リズム感を身につける練習として「リズムまね」「体の動きによるカノン」という練習法を実際に行っている。

まず「リズムまね」とは、先生が体のある部位を触り、それを見た幼児が自身もまねをするというものだ。

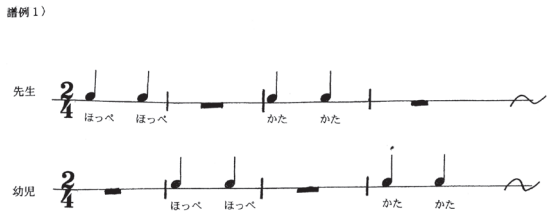
例えば、先生が「ほっぺ」と声に出し頬を触ると、幼児もすぐにその行動をまねる。「おなか」「かた」「あたま」等、次々に色んな部位に展開してまねをさせる。

その動作に慣れたら、次は２回ずつ、３回ずつ、４回ずつと増やしていく。

２回ずつだと「ほっぺほっぺ」と声に出して動作をすると、幼児も「ほっぺほっぺ」とまねをし、一定のテンポで続けていくという具合だ。

同じ速さで続けていく事により、幼児は自然と安定したリズム感・テンポ感が身に付く。

譜例１)



この応用編として「体の動きによるカノン」というものを行いたい。

カノンとは主題を模倣しながら後続が次々に追いかけていくという音楽の演奏法である。一般に輪唱という。

体の動きによるカノンをするには幼稚園年少ではやや難しいが、年中、年長にかけて動作をつられずに模倣できるようになる。

譜例２）

「リズムまね」「体の動きによるカノン」の効用とは、リズムを表現するのに、言葉や打つ場所が違うので、常に考え、言語・動作を確認しなければならない。一連のパターンを繰り返す事により、即時的反応が身に付いてくる。先生の手本を模倣し応用することで、幼児は頭で考え理解し自身の力へと成長することができる。

「リズムまね」「体の動きによるカノン」以外には、動物を用いてリズムを把握させる方法がある。

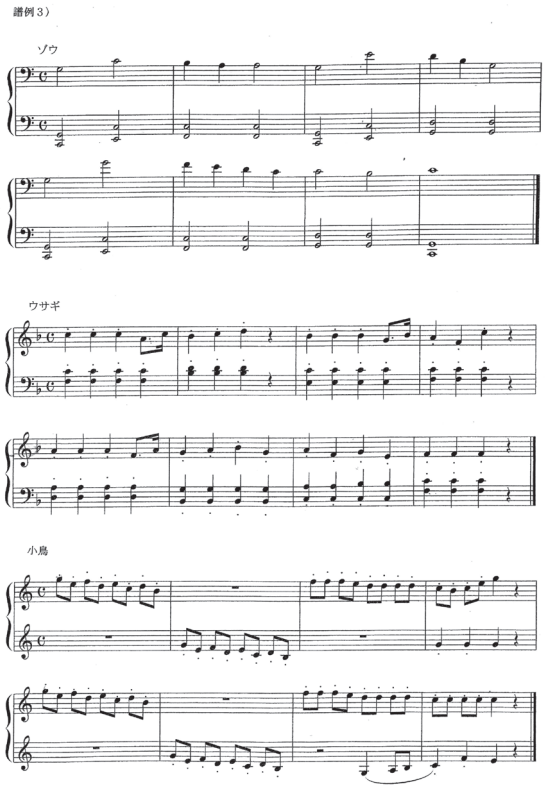
例えば、ノッシノッシと歩く大きく重いイメージのゾウを２分音符とし、元気にかけまわるウサギを４分音符とし、小さくちょこちょこ動く小鳥を８分音符とする。

また動物以外でも子どもが興味を持ちやすい昆虫や乗り物でもよい。

先ほどの、ゾウ・ウサギ・小鳥の説明をすると３種類の簡単な音楽を用意し、ゾウのテーマが聞こえると鼻の長いゾウはブラーンブラーンと２分音符のリズムで歩く。ウサギのテーマが聞こえると、耳の長いウサギはピョンピョンと４分音符のリズムで跳びまわる。

小鳥のテーマが聞こえると羽のある小鳥はパタパタと動かして８分音符のリズムで飛びまわる。このように動物になりきり、先生の模倣をさせながらイメージを持つと、自然にリズム感が養われる。

譜例３）



他にも打楽器と動物を組み合わせて、ゾウは太鼓、ウサギはタンブリン、小鳥はカスタネットに当てはめて動物をあてっこする。

幼児は打楽器の大きさ、音の強さを感じ、動物のイメージを膨らますことによって自然と音符の長さも理解していけるのだ。

（2）音

音の分野については、ピアノを使って指導する。

音には高低があるので、高音の音楽が聞こえたら夜空の星のようにキラキラと手を上げ、振り付けをつけて表現させる。低音の音楽が聞こえたらしゃがんで床をドンドンと叩いて低いことを感じさせる。つまり高低の判別である。

大まかにはこのように違いを把握させるが、歌うとなると実際は喉のコントロールと音をキャッチするのは難しい。幼児に喉のコントロールをさせるには聞いた音を模唱させ、歌うことに慣れさせていく。歌うには息使いの練習も必要になってくる。練習法として、ケーキ等のろうそくの火を消す動作を想像させ、大きく息を吸ってから「フーッ」と長い息を吐く事で複数のろうそくを一気に消させる。この動作を何度か繰り返すことによって、自然と深い呼吸ができる。

このように2つの方法で歌唱法を教えていくのだが、中にはなかなかコツをつかめない幼児がいる。喉のコントロールがまだ難しく、先生の指定する音が歌えない。しかし、そのような場合でも多くは、きちんと音は聞けている。音あてクイズのような事をした際に「ドミソ」と和音が聞こえたら肩を触るというゲームをする。まず「ドミソ」と和音を鳴らし、音色を覚えさす。次にクイズに入り、先生はすぐに「ドミソ」という和音を弾かずに、でたらめな音を大げさに数回弾く。その時お手つきをして、すぐに肩を触ろうとする幼児もいるが、数回でたらめな音を聞いていると違うことにはっきりと気付いてくる。そうしている内に「ドミソ」という綺麗な和音を聞くとハッキリと肩を触ることができる。

こうした音あてクイズを和音・単音で繰り返しする事で、幼児は音に慣れていき、音の微妙な違いを聞き分けることができる。

喉の方は焦らず少しずつ直していけばいいのだ。例えば、高い声が出ない幼児には頭から出るような優しい声で歌わせ、低い声が出ない幼児にはそーっと歌わせる。

（3）拍子

「リズム」「音」の次に「拍子」を学ぶことも大事である。

拍子の練習法は、音楽に合わせてあらかじめ決めておいた動作で体を動かし、拍子感を養う。実際には手合わせ・スウィング・ダンス・肩たたき等をして拍子感を養う。

その後、違う音楽を聞き拍子感を聞き分け、その表現を自分で即時的に行えるようにする。

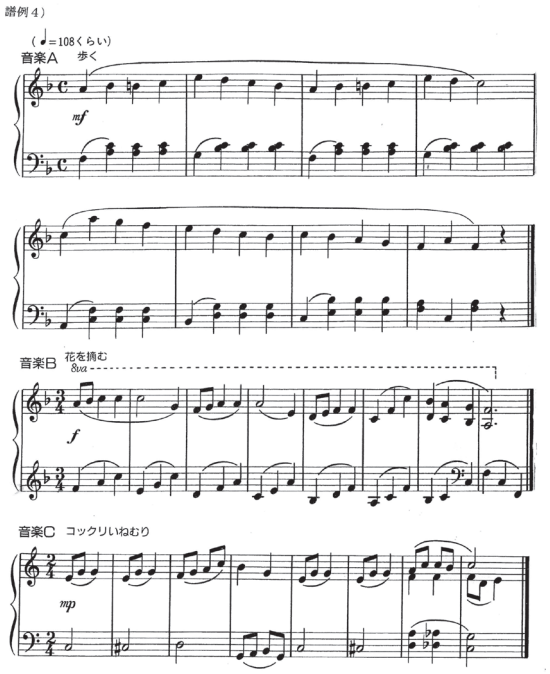
例えば、「花摘み」というリトミックがある。

これは想像活動を通して、4拍子、3拍子、2拍子を比較体験するリトミックだ[2)]。

まず「花摘みに出かけましょう。」という掛け声が聞こえたら歩いて花畑に行く。（4拍子）到着すると、そこへ座って花を摘む。（3拍子）途中で疲れてきたので木陰でコックリと居眠りをしてしまう。（2拍子）という動作をすべて音楽に合わせて、先生の模倣をしながら幼児が行動する。

そうする事によって楽しみながら自然と拍子感を養う事ができるのである。

譜例4）



このように「リズム」「音」「拍子」と感じることができたら、基本的な音楽は成立し表現することができる。

実際、幼児の教育現場で指導するにあたって、これらの方法を踏まえながら実践していくことが

望ましい。

－ 2017. 10. 25 受稿、2017. 10. 31 受理－

まとめ

もともと音楽は、幼児たちの生活の一部であり特別なものではない。

自然音（水の音、木々の重なり合う音、鳥の鳴き声等）は身近にありふれていて、心地良い音、安心する音、興奮するような音、不安になるような音等、色々な音は多様な気持ちにさせられる。

それらが土台となり、リトミックであったり、歌うことであったり、演奏する事であったり人間の表現方法は無限へと続いていく。音楽はその表現するきっかけとなり人と人をどんどんと繋げていく力がある。

言葉がうまく通じ合えなくても、音楽という表現活動はコミュニケーションをスムーズにしてくれる。

改めて、音楽というものは人に影響する力が大きい事に気付かされる。

参考文献：「音楽で育てよう　子どものコミュニケーション・スキル」
二俣　泉、鈴木　涼子
株式会社春秋社
２０１１年１２月２０日

「リトミックってなあに」
岩崎　光弘
株式会社ドレミ楽譜出版社
１９９３年3月２０日

「たのしいリトミック２」
石井　亨、江崎　正剛
創芸書房
改訂新版第２刷発行
１９９５年8月３１日

引用文献：１）「リトミックってなあに」１８頁
岩崎　光弘
株式会社ドレミ楽譜出版社
１９９３年3月２０日

２）「たのしいリトミック２」７６頁、７７頁
石井　亨、江崎　正剛
創芸書房
改訂新版第２刷発行
１９９５年8月３１日